

Ⅳ 屈折感情に関する用語の習熟 にみる二三の考察

乃 ち 村 地

「子どもは明るい」と一口にいうものの、それはあまりに一般的な大人からの見方で、しかも、人間の記憶ができることなら醜い面は忘れて、よい思い出だけ残そうとするように、それは多分に子どもたちに好意的な印象のように思われる。毎日、子どもと付合うことを要求させられている私の職業上からの印象は、そう簡単に、子どもは明るいとかかり言っておられぬ。またそんなところにあぐらをかいた見方だけではつとまらぬぐらに、子どもの明るさの陰には、やはり微妙なかげりがしのび寄っているのを見落すわけにはいかない。

ここで扱う「屈折感情」というのは、本研究会で仮称しているものであるが、いわゆる喜怒哀楽という直接的な短絡的感情流出とは別に、流出を拒む何かがあって、そのわだかまりや、停滞、しこり、その固さ、脆さ、強弱等の感情状態を「屈折感情」の語で代表させてみているものである。

例をとっていうなら、「ダダをこねる」の対象となるのは、大人よりも子どもといてよい。子どものある種の行為に名づけられた用語であるにちがいないが、単なる行為にというより、その行為をさせている感情の状態を洞察・予見しないでは免せられることではない。この場合、洞察・予見して

命名するのはおとなだが、その用語獲得以前においてその行為・動作は始まり、その用語をその行為・動作者が獲得したのちにもその行為・動作は、暫く続く。「ダダをこねる」だけに限らないが、これらを精神と行為・動作のアンバランスとだけ見るよりも、その用語獲得ののちの暫くの実演は明らかにある種の感情状態として、子ども自身が意識したものといえるだろうし、感情に関する限り名辞があつて、その内容としての感情の当てはめを習うわけではない。感情それ自体の流出・あるいはその情動が先行していると考えないわけにはいかない。

従って、こうしたおとなよりも、子どもにも多く見られる感情の屈折の故に示す特定の行為・動作を伴う用語を選び出して、その反応によって、小学生の学年別の感情のかげり具合を見てみることにしたのである。

感情のかげり具合とは少し文学的表現すぎるかもしれない。露骨には、学校教育では正面的には取扱うことをして来なかった、子どもの本体を別にした影の部分であるが、影の部分とはいえ、感情に関する限り実はこちらの方が本体だといつてよい。感情にはホンネはあつてもタタマエは本来無い。しかるに学校教育はタタマエを尊重する行儀よさが、明るさ、健げさ、潔よさ、

雄々しさは喧伝しても、それと反する暗さ、ずるさ、情なさ、女々しさ等は排除されるのを当然としたところであつた。そのくせ、後者の子どもにも出くわすと学校教師はその教育方法のなさに手を焼くのを通例とするのである。そして子どもたち同士の中では、相当に烈しくこの後者の感情の応酬がやりとりされていることを誰も知らないわけではないのである。特にわれわれは知っているはずである。教室と雖も、一たん子どもたちの本音が吹き出したときのその感情の根強さを。私たちは特に子どもたちの生の感情にふれてみようとしたのである。

一、調査方法

問一、次のA・B・C それぞれの語群の中から不適当だと思ふものを省け。

A さげすむ・そねむ・ねたむ・うらやむ

B いじめる・すねる・ひがむ・ひねくれる

C おもねる・こびる・ひねくる・へつらう

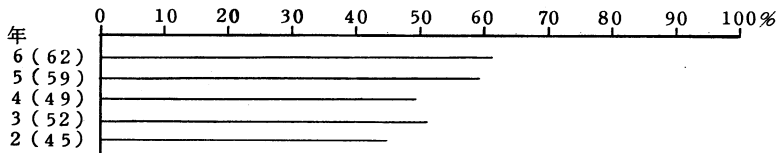
問二、次のそれぞれの語を、同じ意味のものを組み合わせて整理しなさい。はにかむ・ずるい・すはにかむ・ずるい・すげない・めいる・しょげる・ねだる・だます・

問1. 学年毎の正解率

()内は%
□は正解

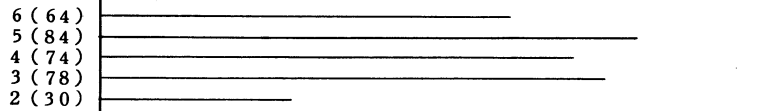
A. さげすむ

そねむ
ねたむ
うらやむ



B. いじめる

すねる
ひがむ
ひねくれる



C. ひねくる

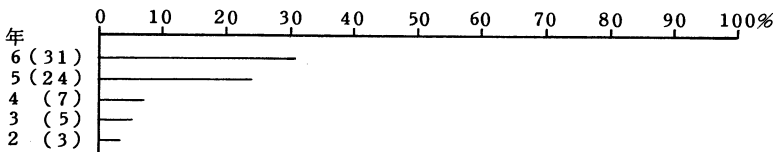
おもねる
こびる
へつらう



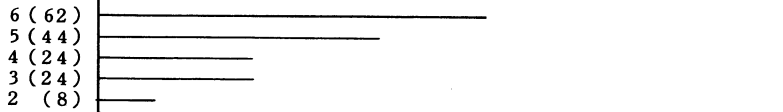
問2. 学年毎の正解率

()内は%

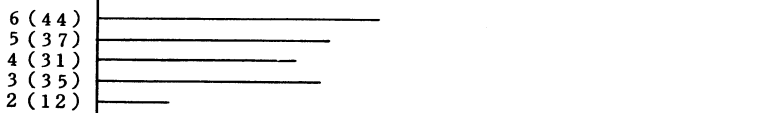
(1) はにかむ
てれる



(2) ずるい
こすい



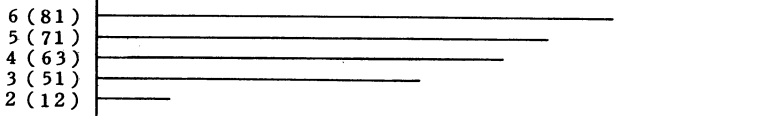
(3) そっけない
すげない



(4) めいる
しょげる



(5) ねだる
せがむ



てれる・こすい・そっけない・せがむ・ごまかす

例) だます・ごまかす

(注) 発問は、それぞれの学年に応じて変えた。

二、調査対象校及び人数

六年生	神奈川県	大正小	39名
	神奈川県	芹ヶ谷小	39名
五年生	神奈川県	大正小	43名
	東京都	本町田東小	36名
四年生	東京都	港南小	35名
	東京都	藤の台小	33名
三年生	東京都	町田第二小	30名
	東京都	藤の台小	33名
二年生	東京都	南第四小	43名
	東京都	四谷第一小	23名

三、問題作成の意図

全体的な考察の方向は前文に記したので、ここではその具体化としての方法の意図を説明してみる。まず問一問二を通じて選んだ語が、前文に述べた屈折感情の全てを網羅しているわけではないが、なるだけ一般的で、おとなよりも子どもたちの生活の中にあるものを任意によりて選んだ。問一問二の共通した形式は、いずれにしろ、そのことばを知っているかどうかよりも、感覚的にそれらを受け入れる感情の持ち合わせが被験者にあるかどうかを見

たいのであるから、同類異類の弁別に

よりてそれを確かめる方法を取った。

問一・問二に分けた理由は、同じ弁別法だが、まず感覚的に一種だけ反撥するだろうものを捨てることから始めさせることによりて、思考を働かせるというより、被験者自身が自分の感覚に素直になりさえすればよいという自然さを期待して問一の形式とした。問二の形式は、問一で慣れたであろう感情の類似性を求めながら、弁別するものとした。本来ならば無作為のまま、カルタ取り形式で類同を発見させるところから、調査すべきであるが、どのようにカルタ取りをするか説明する段階で、例を示す説明に近づいてしまうので、かならずしも無作為にならないという理由と、問題理解に混乱が起きないことのためである。

出題の用語の感情内容、解答するに当って被験者は、どれだけの感情に思いつまらねばならなくなっているか、つまり、この場合出題範囲は、特定の感情範囲である。但し、感情に関する限り、範囲という言い方が妥当するかどうか的確でないが、少くとも、問一のそれぞれの群は、他の群と分離されるそれぞれの群であることを認めないわけにはいかない。その区別をそれぞれ統一する感情名辞で呼称してみると、次の通り整理することができるだろう。

A群(劣情)……うらやむ・ねたむ・そねむ

B群(偏狭)……すねる・ひがむ・ひねくれる

C群(迎合)……おもねる・こびる・へつらう

(一)の中に入れた名辞は、決してそれが絶対ではない。語感によってそれにかわる別の名辞があるかもしれない。今は少くとも、各群に総括名辞が立てられるということによってこれらの感情の性質が動きかをわれわれが区別し得るということが述べられればよい。従ってこのことが体感できる被験者において、撤去されるべき異質の一語が発見されようという仕組みが問一なのである。しかし、子どもたちの目は、テスト作成者と同じ道筋を歩むとは限らないことは勿論である。つまり撤去されるべき一語の方から目が止まり、この一語の動き、性質の方から考えて行くことも起り得るので、各群とも、これらの撤去されるべき各一語の吟味についても考えるところがあった。基本的には次の通り対立するものを選ぼうとした。

A群 美望——侮蔑
B群 被偏狭——原偏狭
C群 迎合——?

右に示した名辞もこれにこだわる必要はない。感情には方向に似たものが

あるように思われるところからの発想である。付記せねばならぬことは、C群は本来、孤高、矜持などの意味合いを持ち日常語が選ばれるべきで、例えば、
「いばる」などよかつたのであるが、
「おもねる・こびる・へつらう」は、子どもたちの態度にはあっても、こはそして、子どもたちの口にまだ充分に上って来いていないように思われるので、意味的取扱よりも音声的な似通から、故意に「ひねくる」を選んだ。

問二に採択されている内容は次の通りである。

○はにかむ——てれる(羞恥)

○ずるい——こすい(狡猾)

○すげない——そっけない(冷淡)

○めいる——しよげる(沈滞感)

○ねだる——せがむ(甘え)

(一)の中は先に述べたと同様に語義にとらわれることなく、その感情の動きと性質の言い当てに便宜なようにしたまでである。

四、調査の結果グラフより

問一—Aについて

三年生が四年生より3%正解率が高いのを除けば、学年が高くなるに従い、正解率も高くなっているが、各学年ごとの差は四年生と五年生で10%の開きが最も大きく、他は隣接学年同士の差

□ 内は正答率，★は誤答に特徴のみられるもの 数字は学年を示す。()内％。例は文中で例題としてあげたもの

こ す い	ね だ る	せ が む	め い る	し ょ げ る	だ ま す	ご ま か す
6(4) 5(1) 4(13) 3(10) 2(3)	4(6) 3(3) 2(8)	6(5) 5(10) 4(6) 3(8) 2(15)	6(12) 5(21) 4(4) ★ 3(11) 2(3)	6(13) 5(19) 4(6) ★ 3(6) 2(5)	2(2)	
6(5) 5(11) 4(1) 3(6) 2(8)	6(1) 3(6) 2(9)	6(1) 5(3) 4(6) 3(2) 2(5)	6(19) 5(9) 4(26) ★ 3(2) 2(6)	6(23) 5(33) 4(25) ★ 3(29) 2(15)		
6(4) 5(8) 4(1) 3(8) 2(6)	5(3) 4(1) 3(2) 2(3)	6(1) 5(4) 4(1) 3(3) 2(9)	6(9) 5(2) 4(3) 3(5) 2(5)	6(10) 5(9) 4(13) 3(6) 2(9)		5(1)
6(5) 5(11) 4(9) 3(3) 2(5)	5(1) 2(6)	6(3) 5(3) 4(1) 3(2) 2(2)	6(6) 5(7) 4(6) 3(3) 2(6)	6(15) 5(5) 4(13) ★ 3(5) 2(12)		2(2)
6(62) 5(44) 4(24) 3(24) 2(8)	6(5) 5(4) 4(7) 3(6) 2(15)	6(3) 5(3) 4(3) 3(10) 2(14)	6(4) 5(9) 4(4) 3(6) 2(3)	6(1) 4(3) 2(2)	5(5) 4(4) 3(6) 2(3)	4(3) 3(2)
	6(3) 4(7) ★ 2(5)	6(4) 5(1) 2(8)	6(8) 5(21) 4(16) ★ 3(14) 2(17)	6(8) 4(10) 3(2) 2(2)		4(1)
6(3) 4(7) 2(5)		(81) 6 5(71) 4(63) 3(51) 2(12)	6(9) 5(16) 4(3) 3(5) 2(5)	5(10) 4(1) 3(2) 2(2)		
6(4) 5(1) 2(8)	6(81) 5(71) 4(63) 3(51) 2(12)		4(1) 3(3) 2(6)	6(3) 3(6)	2(2)	
6(8) 5(21) 4(16) ★ 3(14) 2(17)	6(9) 5(16) 4(3) ★ 3(5) 2(5)	4(1) 3(3) 2(6)		6(22) 5(9) 4(7) 3(5) 2(3)	4(1)	
6(8) 4(10) 3(2) 2(2)	5(5) 4(1) 3(2) 2(2)	6(3) 4(4) 3(6)	6(22) 5(9) 4(7) 3(5) 2(3)			2(2)
		2(2)				例
4(1)				2(2)	例	

問2. 学年毎の誤答率

	はにかむ	てれる	すげない	そっけない	ずるい
はにかむ		— 6(31) — 5(24) — 4(7) — 3(5) — 2(3)	— 6(13) — 5(11) — 4(10) — 3(5) — 2(5)	— 6(8) — 5(4) — 4(10) — 3(8) — 2(9)	— 6(13) — 5(14) — 4(13) — 3(10) — 2(6)
てれる	— 6(31) — 5(24) — 4(7) — 3(5) — 2(3)		— 6(4) — 5(6) — 4(3) — 3(14) — 2(5)	— 6(12) — 5(20) — 4(7) — 3(8) — 2(2)	— 2(11)
すげない	— 6(13) — 5(11) — 4(10) — 3(5) — 2(5)	— 6(4) — 5(6) — 4(3) — 3(14) — 2(5)		— 6(44) — 5(37) — 4(31) — 3(35) — 2(12)	— 6(8) — 5(5) — 4(12) — 3(3) — 2(11)
そっけない	— 6(8) — 5(4) — 4(7) — 3(8) — 2(9)	— 6(12) — 5(20) — 4(9) — 3(8) — 2(2)	— 6(44) — 5(37) — 4(31) — 3(35) — 2(12)		— 6(8) — 5(6) — 4(1) — 3(3) — 2(8)
ずるい	— 6(6) — 5(14) — 4(15) — 3(10) — 2(9)	— 2(11)	— 6(10) — 5(5) — 4(12) — 3(3) — 2(11)	— 6(8) — 5(6) — 3(3) — 2(8)	
こすい	— 6(4) — 5(1) — 4(13) — 3(10) — 2(3)	— 6(5) — 5(11) — 4(1) — 3(6) — 2(8)	— 6(4) — 5(8) — 4(1) — 3(8) — 2(6)	— 6(5) — 5(11) — 4(9) — 2(5)	— 6(62) — 5(44) — 4(24) — 3(24) — 2(8)
ねだる	— 4(6) — 3(3) — 2(8)	— 6(1) — 3(6) — 2(9)	— 5(3) — 4(1) — 3(2) — 2(3)	— 5(1) — 2(6)	— 6(5) — 5(2) — 4(7) — 3(6) — 2(15)
せがむ	— 6(5) — 5(10) — 4(6) — 3(8) — 2(15)	— 6(1) — 5(3) — 4(6) — 3(2) — 2(5)	— 6(1) — 5(4) — 4(1) — 3(3) — 2(9)	— 6(3) — 5(3) — 4(1) — 3(2) — 2(2)	— 6(3) — 5(3) — 4(3) — 3(10) — 2(14)
めいる	— 6(12) — 5(21) — 4(4) — 3(10) — 2(3)	— 6(19) — 5(9) — 4(26) — 3(2) — 2(6)	— 6(9) — 5(2) — 4(3) — 3(5) — 2(5)	— 6(6) — 5(7) — 4(6) — 3(3) — 2(6)	— 6(4) — 5(9) — 4(4) — 3(6) — 2(3)
しょげる	— 6(13) — 5(19) — 4(6) — 3(6) — 2(5)	— 6(23) — 5(33) — 4(25) — 3(29) — 2(15)	— 6(10) — 5(9) — 4(13) — 3(6) — 2(6)	— 6(15) — 5(5) — 4(13) — 3(5) — 2(12)	— 6(1) — 4(3) — 2(2)
だます	— 2(2)				— 5(5) — 4(4) — 2(3)
ごまかす				— 2(2)	— 4(3) — 3(2)

がさほど見られない。(劣情)は比較的早い時期に芽生え、以後はあまり顕著な変化はないと言える。

問一 B について

二年生を除けば、他学年はすべて60%以上のできである。三年生、四年生、五年生の正解率に差が小さいということは、この種の偏狭ぶりを示す明確な時期は、二年生から三年生にかけてということになるだろう。そしてこの語群に關してのみ六年生が五年生より20%も下落する特徴が見出される。この六年生における下落は一体何を示しているのだろうか。半数近くの六年生の子どもがこの分類が出来なかったというのは考えさせられることである。おそらくは、六年生段階に至り、「いじめる」という行為も「すねる・ひがむ・ひねくれる」という行為も、彼等たちの体感からは遠のき始めたのではないだろうか。ことばに対して、体感を持ったものが、ことばを知的にだけ意味を処理する時に起る混乱が、このグラフの結果となったのではないかという推測を敢えて付記しておきたい。

(問二(5)を参照されたい)

問一 C について

各学年とも、極端に正解率が低い。しかも、学年発達に従うこともない複雑な結果となっていることをこの語群に關する特徴といわねばならない。三・

五年が10%の出来、二・六年が20%の出来、四年生だけが30%の出来という甚だ成績不良である。原因として、彼等たちにとって、「おもねる」「こびる」「へつらう」の語は日常使用語ではないこと、既述したところであるが、弁別語に特に、音聲的似通りはあるが、感情的働きとしては無関係な「ひねくる」を選んだために起きた混乱もあったかも知れない。それにしてもこれらのことばが彼等たちにとって日常使用語ではなくとも、彼等たちの生活行動の中にはこの%とは思えぬ迎合ぶりをわれわれは知っている。あまりにも習慣的行為というのは言語化を妨げるものなのであろうか。この点は後考を待たねばならないが、この語群に關する限りあらわれた隔年毎の伸びたり縮んだりの交互のパターンは何が原因するのであろうか。もし、この語群の感情方向が迎合ということにおいて、この結果だとするならば、このデーターから迎合という感情の特性が、少くとも小学生においては反省されるかもしれない。つまり、迎合は波を打って繰返されるというようなことにもなるとするならば、われわれ現場教師は感情発達の周期的反復の時と相とを心得ねばならないだろう。想像に走ることながら、現今の二年間担任持上り制とは全く無関係であらうか。迎合という感情に限

定したところだけ気になるままに提出しておく。

問二(一)はにかむ・てれるについて

全学年とも正解率は極めて低い。おそらく「はにかむ」が彼等たちの日常語でないせいであらう。二・三・四年生では大差がなく、五年生で、急上昇している。語彙的理解が五年生で出来るようになるといっても、25%程度の出来栄なのだから、「はにかむ・てれる」の意識化なり、この意識の分化は遅い。余計なことながら、このことは戦前の子どもには理解がつかぬほど現代っ子の開放ぶりを物語っている。勿論無意識で「はにかむ・てれている」場合は、この調査にはあらわれない。この意識化の遅進の具合と、この羞恥心の起伏との関係を明らかにしなければ次代においても『菊と刀』の国民であるかどうかかわらなくなるだろう。少くとも過去の日本人はこの羞恥心を一つの美德に作り上げてはいたのだから。現代の小学生の羞恥心はおよそ美德とは程遠い。特にこの「はにかむ」を「めいる」または「しょげる」と結んだ者が、他のどれと結びつけるよりも五年生に多かったというのは現代っ子の感覚面を覗かせているように思える。決して、でたらめがそうした結果を生んだのだと言えないのは、「てれる」の場合にも「めいる」「しょげる」

と結んだ者が多いことである。次がその例である。

はにかむ↓てれる

六年31・五年24・四年7・三年5・二年3 (%)

はにかむ↓めいる

六年12・五年21・四年4・三年11・二年3 (%)

はにかむ↓しょげる

六年13・五年19・四年6・三年6・二年5 (%)

てれる↓めいる

六年19・五年9・四年26・三年2・二年6 (%)

てれる↓しょげる

六年23・五年33・四年25・三年29・二年15 (%)

彼等たちにとって「はにかむ」「やてれる」「がどうして」「めいる」「や」「しょげる」と類似したり、接近したりするのか?もし仮りに、彼等たちにとって「はにかむ時、もしくはてれる時は、めいたり、しょげたりする時とするならば、われわれはこれを直ちに誤りとはしないで、少くとも一顧しなればならぬ課題があるように思う。それはことばの上で処理される以前に、彼等たちは感覚上の類似を探し出した結果だとするならば、彼等たちの羞恥心は直観的に深く自己慚愧の念と結びつくものであるかもしれないからである。美德

への道は甚だ遠い。しかし、羞恥心に根源的に自虐性とは無縁だと言えない限り、彼等たちのこの直観は無視できないし、羞恥心が美德だとしてまた根底の感覚にも通じ合うものでもある。具体的に言えば、『はにかむ』『てれる』そのこと自体に彼等たちは価値を見出し得ない。しかし、やがて見出せるために、そのこと自体の精神的裏打として、『めいる・しょげる』魂を直観しつつあるのかもしれないということである。

問二（ずるい・こすい）について
問二の組み合わせ中、（ねだる・せがむ）について、正解率が高いのも、やはり行為とその感情指摘がなるだけ具体的、直観的であるものから順に学習し易いのだということを教えてくれる。ただ、三年生・四年生の段階で、グラフの伸びが同率を示して停滞するのは注目をさせられる。このことについて、最も興味深いのは、『ずるい』を『はにかむ』と結びつけるピークが四年生であったということである。

六年 6・五年 14・四年 15・三年 10・二年 9（％）
つまり、『ずるい・こすい』の語そのものの感情よりも、それに刺激された次の自己反応を想起してしまったのである。ずるいことは、はずかしいこと

と直結している学年が四年・五年といえる。このように観念へ進む方向と、一方現象を連想してしまったのも四年生に多い。たとえば、『ねだる』との連合である。

六年 5・五年 4・四年 7・三年 6・二年 15（％）（以上ずるいの場合）
六年 3・五年 0・四年 7・三年 0・二年 5（％）（以上こすいの場合）
二年生が高率なのは言うまでもなく微笑ましいが、四年生がそれと結びつける理由は二年生とは違う思考の発達があるからとしてやりたい。他に、『ずるい』と『だます・ごまかす』と連合した例においても

六年 0・五年 5・四年 7・三年 2・二年 3（％）
とあって、四年生は『ずるい・こすい』の感情は多岐にわたって揺動している時期だといえよう。

問二（そっけない・すげない）について
対人間における感情の触れ合い具合をいう語であり、特にそのあしらわれる受身の側の感情用語と言つてよいだろう。全体的に人間接触の対応ぶりを言い当てるのだから、小学生にこれだけの感情が既に備えられつつあることは、常識を改めさせるに足るのではあるまいか。二年生と三年生との間に23％もの開きがあることも注意してよい。

いわゆる人間臭いのある感情だけに、また四年生段階に低迷があるのも前項と同じ理由が考えられる。但し本項では、四年生以上、成長につれて、『すげない・そっけない』をはにかむ・てれるに、あるいはしょげるに連合させているのも見逃せない。

六年 62・五年 55・四年 55・三年 46・二年 42（％）

つまり、『すげなく、そっけなく』されることによって受ける感情が大きくなるということである。

問二（しょげる・めいる）について
何故これほど感情が低調であるのかよくつかめない。『めいる』の語が彼等たちの日常用語でなかったということとは考えられるが、『はにかむ・てれる』の項で述べたように、『しょげるとめいる』を連合させた率よりも、『しょげる』または『めいる』を『はにかむ』あるいは『てれる』に連合させることの方が、五年に集中してあらわれ、六年ではそれが止むという動きと無関係ではあるまい。『めいる・しょげる』が見つともないこととして意識されて、まだ、『めいる・しょげる』を沈潜する感情として味わうに至らないということである。

問二（ねだる・せがむ）について
二年生と三年生との間に大きな差があり、三年生から急速に伸びはじめ、

三年生以後は、学年がすすむに従い、少しずつ順調に伸びている。また、二年生を除けば、全て50％以上の出来栄であるものもおもしろい。ずるい・こすいの項で記したことに関連して、やはりねだる・せがむを感情として受けとめているが行為として見ているか気になるところであるが、結果的には、こうした感情と行為との一本化したものはわかりがよいのだということである。おとなの側から言えば、このねだる・せがむなどを最も屈折感情だしたいのに、子どもたちにしてみれば、少しも屈折感情でないものを見ているのかもしれない。誤答を調べてみると、殆んど二年生だけに乱れが見え他の語との連合させる特徴がみえる。ねだる・せがむを、ずるい・こすいと結んでいるのも二年生らしい智慧ではなかったかと思われる。

ずるい↑ねだる 15％
ずるい↓せがむ 14％
こすい↑ねだる 5％
こすい↓せがむ 8％

（東京・藤の台小教諭）